

## 乳幼児の保育環境について（その５） —パン作りを中心とした総合的な表現活動における感性の育ちについて—

○重森澄江(美作女子大学) 美崎幸代(下東条中央保育園) 竹井 史(富山大学)

はじめに

日本保育学会第４７回大会研究論文集において、食生活における「赤米」を中心とした生産活動及び自然色による幼児の感性の育ちについて報告した。本報告では食生活に関する継続として、パン作りを中心とした生産活動に重点を置き、幼児の感性を育む保育環境のあり方について考えたい。

### １、目的

現在、幼児をとりまく保育環境は生産活動を直接体験できる機会が乏しい。食生活面では、主食として米食に加え、パン食が一般的である。当園でも週、１、２回は間食としてパン食が実施されている。このような社会的背景の中で、乳幼児共にパン食を好む傾向が強い。

本研究では以上の理由から、０歳～５歳の幼児を対象に主にパンをもとにした触覚、臭覚、そして造形的といった総合的な感覚体験活動を計画し、その活動を通じて形成される感性の変容について考察する事を目的としたい。同時に、その活動と関連し、幼児の感性を育むための望ましい環境設定のあり方について考察したい。

### ２、計画

期 間：平成６年９月～７年２月

対象園：兵庫県小野市下東条中央保育園

対象児：０歳児３名、１歳児１０名、２歳児７名、３歳児  
２５名、４歳児１８名、５歳児２７名 計９０名

### ３、活動のねらいと展開

#### (１)活動のねらい

目的の部分と関連するが、本研究ではパンによる造形という複合的な活動を教材としつつ、その経過で育まれる感性のありように着目した。そのため、今回の活動については以下の点に留意した。

①まず、パン作りについては主に実物の小麦を見て触り、こね、発酵し、焼く過程で変質するパン生地の特徴を触覚及び臭覚体験といった感覚体験としてとらえられるよう留意した。

②次に、造形面では色彩、形態両側面で次のような配慮をした。まず、色彩面では近年の高明度、高彩度を持つ原色使用が多い現状に対して、自然色の持つ風合いを実現させるための色粉について配慮した。形態面では乳幼児において、パンが焼ける経過の中におい

て変わる量的な変化の面白さに主に留意した。

#### (２)活動の展開

春季、園庭の花を見たり、匂ったり、近くの田んぼなどで、レンゲの花を見て「きれい」といってそれを摘み、その花の蜜を口にして「あまい」（２歳児）とその味覚などにも関心を示した。夏季は水遊びを中心として水の感触を味わい、砂場などでは砂、土を触り、握り、形作りをする、こわすなどの動作を繰り返して、感覚的な遊びに興味を示した。秋季、原っぱでバッタやこおろぎなどを見つけ、それをつかまえて遊ぶなど動植物に興味・関心をもつ。また、園庭のうさぎを見る、触るなどの経験から、「うさぎさん人参たべて！」「おなかすいた？」（２歳児）などと動物に対して自ら愛情を示すようになり、うさぎの毛などをなでながら「ふわふわ」「きもちいい」とその感触にもあたたかな表情を示すようになった。

食生活面では地域で収穫した果物（西瓜、桃、ぶどう、柿）、栗、市販のりんご、なしなどを丸ごと手にとって見る、触る、匂うなどの関わりを通して「いい匂い」とそれを両手でもって匂う。また、それらを乳児の目の前で皮をむき、友達と一緒に喜んで食べるなどの経験がある。

①９月中旬、小麦粉粘土で遊ぶ。その過程で、感触や色、形作りに興味を示した。特に０歳児はすぐに口に入れてなめたり、手で握ったり、投げたりといった感覚的な遊びがなされる。１歳児は指で小さくちぎる、ひっぱる、たたくなどの活動。２歳児では「うさぎ」「おさかな」「ゆびわ」など身近な生活と関わりのあるものにイメージして形作りをする活動が見られた。  
②１１月初旬、小麦粉で団子作りをする。小麦粉粘土の感触の良さや、０歳児がしきりに口にする事から、それで団子作りをして食べようかと促すと、「うん」「やりたい」と嬉しそうな表情をする（１、２歳児）。色は「赤」「ピンク」の要望があり、自然食品の人参でその色に近いオレンジ色の団子を作ろうと促すと「うれしい」「うさぎさんも好き」（２歳児）と身近な経験を言葉で表現する。そこでうさぎになってリズム表現を１、２歳児が楽しんだ。保育者がおろし器で人参をすりおろしているのをじっと見て（１、２歳児）、自分たちもやりたい表情をしているので、一緒におろした。そ

れを触って「どろどろになっとる」「色はオレンジ」(2歳児)との表現がなされる。すったものを布でしぼる。1,2歳児のほとんどが全身を乗り出して、一本の個体から液状に変化していく様子を驚き、また不思議そうに見ていた。ココアの匂いを「いい匂い」「チョコレート匂い」などといい、その匂いに関心をもつ。着色は人参(オレンジ)、口なしの実のエキス(黄)、抹茶(緑)、ココア(茶)の4色。小麦粉に各色の色液を加えて混ぜてこねている様子を見て2歳児が「させて」と言う。すると1歳児も含め、次々と積極的に関わってくる。その経過の中で感触、質感のよさから「きもちいい」と明るい表情をともなった評価がなされた。形作りでは2歳児は前半団子や丸の形にしていたが、後半は「へび」「ドーナツ」「うさぎ」「家」など。1歳児は生地を手の中で握る、たたく、片手に持って他方でひっぱるなど素朴で初歩的な表現活動がみられた。それを沸騰した湯に入れ、出来上がった団子皿に盛っていると、2歳児は自分の机に椅子を運び、0,1歳児は身を乗り出し、手足を振って喜ぶ表情が見られた。2歳児はオレンジ色のものに人気が高かった。

### (3)12月初旬、パンを作る。

年長児のパン作りを見学する。特にパン生地をボールにたたきつけている状態をじっと見て1,2歳児が全身を乗り出しているの、それに参加させてほしいとの言葉をかける。と、「Sちゃんこれを持って、ここを投げるといいよ」と両手に生地を持たせる。全児(1,2歳児)がそれぞれボールに向かってその生地をしっかりと持ち、投げて喜んだ。事後、2歳児のT児はグループの後方に行き、全身で踊るように両手を上に振りながら、その場を一回転して喜びの表情をする姿が見られた。形作りでは1歳児は2歳児のパン作りを見て、たたく、ひっぱる、小さくちぎる、丸めるなどの表現をした。2歳児は机上でそれをなでる、グルグル回す、たたくなどから後半は「うさぎ」「へび」「家」「ヘームン」などと命名する。その生地の上に干しぶどうを一粒ずつゆっくりと並べていく。他児もそれを見て模倣し、干しぶどうをつけて喜んだ。色はオレンジ、黄色などの単色。

第1発酵では大きくふくれた生地をみて、「ふくれとる」(2歳後期)と発言する。2歳児の一人がその生地をそっと指で触ってみると、傍らの2,3人もその生地を触って互いに顔を見合わせ、その柔らかく大きくふくれた生地を探索しているように思われた。

第2次発酵では焼き上がったパンを見て、「いい匂い」「私のこれ」「食べたいなあ」とつぶやいたり、

自分たちの手作りパンを見せ合いながら明るい雰囲気の中で喜んで食べた。0歳児もパンを持って、近くの仲間の顔を時々見ながら喜んで食べた。

### (4)パンやさんごっこに参加して遊ぶ

パン作りの事後、4,5歳児が中心となり、①小麦粉粘土でパン作りをする。②焼く、③売る、④買うなどのグループになり、ごっこ遊びに発展する。特に1,2歳児は作るグループに入り、丸める、細長くのばす、たたくなどから「くねくねへび」「メロンパン」などを模倣して作って遊ぶ。4,5歳児の積み木の「かまど」で自分の作ったパンを入れ焼こうとする(2歳児)。④の客になり、4,5歳児が1,2歳児の手をつなぎ、「パンを買いに行こう」と優しく援助し、人形をおんぶさせてもらったり、紙袋をもらって一緒にパンを買い、その中に入れ、家に帰り、人形にパンを食べさせたりして満足そうな表情をする。

## 4. 考察

(1)乳児期前期ではレンゲの花を見、匂う、蜜の味を楽しむなどの自然体験、日々の活動として動物の飼育やそれへの触覚体験、更には命あるものとの感動体験、それらの体験をふまえた自己表現活動などが感性を育む基礎的な体験となったと考えられる。後期においては小麦粉粘土という造形素材との出会いからその感触のよさが団子作りとなり、造形化の過程で出会う自然色の素朴な色彩体験、匂いの良さ、さらにはそれを食するといった感覚的な刺激が重なり、一人一人の活動そのものが主体的になっていったと思われる。

(2)パン作りを中心とした過程では、これまでの体験を生かし、生地作りに挑戦し、意欲的となった。次に発酵した生地の量的、質的变化の感触を指で確かめ、感触の良さを主張するといった好奇心の表れを示した。形作りでは0,1歳児は造形表現の初歩的な素朴な表現を喜び、次への意欲を示した。2歳児は身近な家、うさぎなどのイメージを広げ、干しぶどうをつけるなどこれまでにない質的な高まりをみせた。特にココアの匂い、パンの匂いに関心を示した。「私のはこれ」などとその作品に自信と誇り、さらに次への意欲を示唆していると思われる。

(3)パンづくりが動機となり、異年齢時の適切で暖かい人的環境によるごっこあそびへと発展し、言葉のやりとりなどが更に広がりをもてた。更に日々の活動による造形表現、身体表現、リズム表現など、これらの総合的表現活動は貴重な直接体験がもたらした自己表現活動でもある。保育者と子どもと子どもの共感、感動こそが豊かな感性の芽を育てていくと思われる。